

カトリック六甲教会 教会報

2013

9

No.501

沈黙

ダニエル コリンス神父

皆さんはこの暑い夏をどのように過ごされていますか？ お元気でしょうか？

夏になると多くの修道会が黙想会を行います。この夏、私もシスター方の黙想会の指導に、神戸より涼しいところへ行ってきました。

雑音ばかりの生活の中で沈黙の時間を持つということは大切なことだと思います。日々の忙しさに追われて、考える場所も考える時間もないでしょう。沈黙の時間を日常生活の中に作り出さなければなりません。

暮らしの中で30分間の沈黙を守るのは不可能なこととなっているでしょう。聖書を読むと、イエス様は弟子たちから離れ、一人だけの時間をもたれています。時には一晩中、誰も居ないところで時間を過ごされています。神様に会うための時間、たった30分の時間ですら見つけることはとても難しいことになっています。それでも沈黙の時間は作り出さなければなりません。神様と二人きりの時間です。ただ神様と居る、とはなんとありがたいことでしょう。

この夏、私は毎日15分沈黙することを目標としました。短い時間ですが、今まで語ってきたように、それはとても難しく、なかなか上手くはいきません。むしろ失敗ばかりといえるでしょう。しかし、神様と会うため、私は沈黙を求めています。

忙しい、は沈黙できない理由にはなりません。「宝物のあるところに心がある」と言われます。それでは私の心はどこにあるのでしょうか？ ゆっくりと神様に会い、ゆっくりと神様に話しかけ、ゆっくりと神様からの返事を待つ — そんな宝物のような時間なら積極的に作れるはずです。大切である、という確信があればできるはずです。

まだまだ暑いながらも季節は秋に向かいます。夜も少しずつ長くなっていきます。神様との大切な時間を過ごしてください。





新シリーズ

「何でも知っとこ」(6)

“巡礼について”

主任司祭 松村 信也

「巡礼」といいますと一度や二度は、体験された方も多と思います。しかし、巡礼は基督教のオリジナルではありません。仏教もイスラム教もその他の宗教にも巡礼はあります。また今日では、古寺巡礼、世界遺産巡礼、湖水巡礼、音楽、芸術、そしてグルメ巡礼まであります。宗教的な巡礼から始めて、観光、そして趣味の巡礼までいろいろな巡礼がありますが、巡礼とは一体何なのか、その根源を探ってみたいと思います。

「巡礼」を辞書で調べますと、聖地・霊場を参拝してまわる宗教的行為のこと。有名なのは、キリスト教徒のエルサレム巡礼（イスラエル）、イスラム教徒のメッカ巡礼、また日本では西国・四国巡礼などがあります。ちなみに日本では、平安時代の中頃から主に修験道や仏教の僧侶たちの修行としてとして始まり、やがて布教方法の一つとして巡礼が行われるようになったと伝えられています。また巡礼することによって心が癒される巡礼は、次第に庶民の間にも普及し、江戸時代に入ってから巡礼（西国三十三箇所、四国八十八箇所、お伊勢詣で）する人が増加していったそうです。

現代人にとって、殺伐としたこの世に望みを無くし、自分の生き方、将来に対する不安からか「心のよりどころを求めて」大勢の人々が、「巡礼」にその場を求めているのです。

心の拠り所を求める巡礼は、霊場から霊場、目的地に向かって町から町へ旅をして行く内に、自然に心が洗われ、信仰の世界に入っていく自分を見いだすことが出来るようになると言われます。

言い換えれば、巡礼をしていく内に、自分が自分を深く見つめ、赤裸々な自分との直面をし、本当の自分を知らされるのです。それによって新たな自己発見をするのです。そして、自己による自己の救いと新たな力を得て新しく生まれ変わる事の出来る、そんな機会を与えてくれるのです。勿論、巡礼したから、必ず誰でもそうなるとは限らないでしょう。

「かわいい子には旅をさせる」という諺がありますが、人は旅（自分の足で歩く）によって本来の自分になるよう磨かれるのです。それは巡礼の途上で人、出来事、知らない土地の風俗習慣などの出会いによって、知識だけでなく、心の広さ・深さが過去の自分よりも大きくなっていくのです。例えば、四国のお遍路さんの場合、いろいろなルールがあります。“十善戒”という生き物をころさない、盗みをしていない、嘘をつかない、人の悪口を言わないなどなど。これらを巡礼中に遵守することによって、沢山の気づきから普段の生活の改善、より良い人間形成へと繋がっていくのです。

イスラム教の「巡礼」は、信者としての義務になっています。つまり、信者であれば一生に一度聖地メッカへ「余裕があるかぎり」巡礼することが、義務とされます。皆同じ白い服を着て、7日間、一斉に世界の各地から集まり、聖地メッカに向けて巡礼します。勿論、観光旅行ではありませんし、遊びでもありません。人種国籍は違っても、皆同じ服を着て、同じ時、同じ場所に集まり、アッラーの神への帰依を示す大集団行動と言われています。

基督教巡礼の代表は、エルサレム巡礼、“サンチャゴへの道(サンチャゴ・デ・コンポステーラ)”、また“長崎への道”があります。いずれの巡礼も聖人たちがキリストの歩んだ道を巡礼に託して、その道を巡るのです。巡礼の途上でイエスの受難、死、そして復活を思い起こしながら辿った聖人たちのように、自らも旅を通して体験していくのです。

ただひたすら歩く、来る日も来る日も希望を抱いて歩み続けるその途上で自己との戦い、赤裸々な自分との直面、新たな自己発見、そして真のイエス・キリストとの出会いの体験こそ巡礼の本質的な目的ではないでしょうか。



忘れないで!

～東日本の被災地から～

「東日本被災地のボランティア活動報告」

第5回(最終回) 「つながりをありがとう」

沖田

「どこから?」「神戸から」、多くの場合この会話から始まる、地元の方とのつながり、そして「何にしても、神戸の方の反応がどこよりも早かったんだよね。物資にしても、ボランティアにしても」とあちこちで聞きました。「今欲しいもの、あったら役に立つものっていうのがわかってるんだろうね。カセットコンロにしても、太陽光発電パネルにしても、どれだけ役に立ったか。」と、自分がしたわけでもないのに感謝されて、ずいぶんこそばゆい思いをしました。

確かに、大きな震災を経験したからこそ、蓄積された知恵や経験が生きていたこともあるでしょう。しかしそれ以上に、「恩返し」という気持ちと、「寄り添い」の自然な衝動があったからこそ、神戸の人々は早くから、適時適切な支援をしてきたのだと思います。

今でこそ美しいエメラルドグリーンの、透き通った海ですが、津波が襲った後しばらくは地獄の様相だったそうです。多くのボランティアが毎日、打ち上げられた瓦礫を拾い集め、分別しては処理し、ここまで回復したとのこと。地元の人だけでは絶対にできなかったことだと言います。大規模な復旧作業が始まるまでに、多くの人たちの善意が後押しして、漁業の再開ができた、それを心からの感謝の言葉でボランティアに伝えてこられるのです。

漁協の責任者の方が、集まった多くのボランティアを前にこう話されました。

「こうして毎日のようにたくさんの方が助けてくださる。それも違う人たちが入れ替わり、何の見返りもないのに笑顔で手伝ってくださる。それを絆とかつながりとか、簡単に言葉で言うけれど、つなぐのは皆さん、ひとなんだとつくづく思います。金とか、ものじゃない、ひとあってこそそのつながりを、こんなに見られることに感謝します。」と。まさに最大の感謝の言葉ではないでしょうか。

神様がそこにおられる、というのは簡単です。でもそれは何に働いておられるのか、そこに集まった、善意の多くのボランティアだけでなく、被災された方々の内にも、見えない力を注がれているのだと思います。だからこそ、日常では聞き流してしまうような言葉が強く心に残り、来てよかった、できればまた来たいと思うのでしょうか。

神様を信じる、信じないというより前に、ひとがひとに対して動いたら、そこにつながりが生まれます。その相手の中に何を見出すのか、そこから求めるものも、与えられるものも出てくるように思います。

カリタスジャパンが積極的に関わる中で、そんな「気づき」のきっかけをみんなに与えているのだとしたら、これほど自然な「宣教」は他にないように思います。

大阪からバスを乗り継ぎ、16時間先にある大船渡は確かに遠い町でした。途中気仙沼・陸前高田を通過する時に見えた光景で、膝ががくがく震え、涙が止まりませんでした。現実にもそこにある被災地の姿、来る必要があったのか、来てよかったのか、悩みました。

大船渡ベースに到着して暖かく迎え入れられ、多くの出会いとつながりを得て、米川ベースへの移動、そこでも多くのつながりを頂きました。多くの若いボランティアからもらった力は、日常生活では絶対に得られないものでした。

また、カリタスジャパンの活動に関わり、ベースを複数経験したことで、活動方法の違いや支援する内容の違いを知ることにもなりました。大阪教区が支援する大船渡、仙台教区がサポートする米川、また釜石・大槌等他のベースそれぞれが異なる支援を行っていることも、



<気仙沼市街>



<大船渡市街>

ボランティアに来ていた仲間から教えて頂きました。ベースそれぞれの事情の中で、今後どういった支援ができるのか、それもボランティアあってのことで、決してお金や物では解決できないことが多いのです。

そんな中で、本当に短い期間でも活動させて頂けたことに感謝しています。つながりを芽生えさせてくれたのは、そこで出会ったすべてのひとです。その中に、確かに神様の力が働いていたのだと確信しています。

それぞれのベースの活動内容をブログでみることができます。関心のある方はどうぞ。

大船渡ベース

<http://ameblo.jp/ofunatobase/>

米川（南三陸）ベース

<http://cjyonekawa.wordpress.com/>

※5月から5回にわたって掲載されました「東日本被災地のボランティア活動報告」は、今回は最終回です。沖田さま、貴重なご報告をありがとうございました。広報部では引き続き、シリーズ「忘れないで！東日本の被災地から」への原稿を募集しています。被災地でのボランティア活動に限らず、遠く神戸からの支援活動や被災地への思い等、皆さまからのご寄稿お待ちしております。（広報部）



<行事報告>

ワールドユースデー2013年リオデジャネイロ大会(7月21日~28日)

7月21日から28日まで、ブラジルのリオデジャネイロで第28回ワールドユースデーが開催されました。新しい教皇フランシスコは、自分で黒い書類カバンを持って飛行機に乗ってブラジルへ向かい、とてもオープンなパパ様専用車でリオの街を走りました。ボランティアとしてパパ様の通路を守るお仕事を頂いて、目の前を通り過ぎるパパ様専用車を見送る機会を頂きました。一瞬で通り過ぎてしまうパパ様ですが、その笑顔に瞬間に魅了されてしまいました。

ブラジルでは異常気象なのか、トロピカルなイメージとは裏腹に、しとしと雨が降るたいへん寒い大会となりました。それでも人々は熱い熱意を持って、大会会場であるコパカパーナビーチにゾクゾクと集まり、見渡す限り人でビーチは埋まっていきました。後に発表された数字は、300万人とのことで、その多さに驚きましたが、皆、パパ様に会いたい、パパ様と一緒に祈りたいという同じ思いで集まっていた事を体験するイベントでした。最後の派遣ミサにおいて、300万人の沈黙の祈りは、神様のもとに一体であることを実感する素晴らし時でした。

マドリード大会の時から、私のボランティアとしての仕事は、ソーシャルネットワークチームの一員として、Facebook と Twitter で大会の様子を日本語で発信することです。21カ国語がそれぞれの言葉で、大会に来られなかった人たちにもその様子を伝え、大会の前後にもその体験を分かち合い、これから次の大会に参加したいと思ってもらうことが私達の使命です。日本語チームは、私を含め現地で3名、日本からのサポート1名という体制で、今回の大会の様子を発信することができました。日本からのたくさんのお祈りのサポート、見ているという励ましコメントに支えられて、無事に今回の大会を終えられたこと感謝いたします。



「だから行って、すべての人を弟子にしなさい。」というテーマの元に集まった世界中の青年たちが、リオ大会での巡礼の旅をその出発点として、それぞれ戻った場所で、神様との体験を分かち合う事ができますように。大会に参加した350万人のそれぞれの場所での働きが実るとしたらどんなに素晴らしいかと楽しみでしかたありません。次の大会は、ワールドユースデーの創立者である故ヨハネ・パウロ2世の列聖を記念して、ポーランドの生まれ故郷で2016年に開催されます。（本郷）

<行事報告>

広がる善意の輪 ～「ふっこうのかけ橋」2013 終了報告～

片柳 弘史 (助任司祭)

皆さまがたの全面的なご理解とご支援によって、今年も「ふっこうのかけ橋」の全プログラムを無事に終了することができました。初めにそのことを心から感謝したいと思います。

今年の「ふっこうのかけ橋」は、神戸地区全体での大きなキャンプに福島の子どもとお母さんたちを招いた昨年とは違い、各小教区やブロックでのキャンプに数家族ずつを招待するという形で行われました。今年は、昨年の「ふっこうのかけ橋」の様子を新聞などで知り、共感して問い合わせた来られた箕面教会や山口教会も受け入れ側に加わって下さいました。その結果、今年は子ども 23 名、お母さんやおばあちゃん 13 名、合わせて 26 名が福島を離れ、短期保養をすることができました。

子どもたちが海に山にと元気に遊んだ山口教会でのプログラムは、8月18日付のカトリック新聞でも紹介されましたのでご存知の方も多いと思いますが、他の教会もそれぞれの特徴を生かしたすばらしいキャンプを準備してくれました。例えば、たかとり教会ではベトナム人コミュニティーの全面的な協力ですべて全長 15m の特大ソーメン流しが行われ、北須磨教会では信者さんたちが釣ってきたばかりの魚で BBQ 大会が行われました。箕面教会は、子どもたちを一日、USJ に招待してくれました。

お母さん方や子どもたちと話していて痛切に感じたのは、放射能汚染の苦しみはまだ終わっていないということです。多くのお母さんが不安を感じ、子どもと一緒に移住したいと望んでいますが、政府・東電はその必要がないとして一切協力しようとしません。不景気が続く中、40 歳を過ぎて仕事や家を捨て、まったく知らない場所に行って子どもたちを育てるだけの収入を見つけることは不可能に近く、一部の富裕層や県外に親類のいる人々以外は移住の夢も実現することができないそうです。

そんな中で「ふっこうのかけ橋」の存在意義はますます大きくなっています。どうぞ今後ともご支援、ご協力のほどよろしく願いいたします。

<行事報告>

教会学校キャンプ(8月8日～11日)

キャンプチーフ 藤本

六甲教会学校は、8月8日(木)～11日(日)に兵庫県立兎和野高原野外教育センターにおいてキャンプを行いました。平常の教会学校に参加している子供たちとそのお友達に加え、今年度は小さき花の園幼稚園の教会学校の子供たち、「ふっこうの架け橋」プロジェクトつながりて参加した福島の子供たちも参加し、リーダーも合わせて総勢100名ほどでキャンプを作り上げていきました。

今回のキャンプのテーマは「そうぞうしよう!!」でした。「そうぞう」は「想像」と「創造」の二つの意味をかけています。普段の生活の中で「そうぞう」する機会が少なくなっている子供たちに、他者の気持ちを想像し思い遣る事、自分にしか作り出せない自分らしさに溢れたものを創造する事の大切さを感じてもらい、周りの人、そして自分を笑顔にするための鍵となる「そうぞう」を普段の生活の中で実践できるようになってもらいたいとのテーマにし、プログラムを組み立てていきました。秘密基地を創造したり、身の周りの当たり前とと思っていることについて想像したりと、キャンプでたくさん「そうぞう」することができました。

今回のキャンプは、関わった人全員で作ったキャンプだと思います。誰か一人でもかけていたらこのキャンプは成り立ちませんでした。子供たちはもちろん、班つきの大人のリーダー、学生リーダー、お食事リーダー、保護者の方々、教会での準備活動に関わってくれた方。すべての方にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

子供たちのこれからの人生が「そうぞう」によって豊かなものになりますように。そう切に願っております。

以下、参加した子供たちの感想文です。



キャンプで一番たのしかったのは肝だめしでした。ぼくはひさのり君達と行って楽しみました。肝だめしは自然学校でもやったことがあって、これで二回目だったけど、今回は二分ごとという時間制ということもあって、違った楽しみだったし、CDで気分が盛り上がったので、来年中学生になってもやりたいと思いました。

(6年 平太)

今年の教会学校のキャンプは、小学校最後のキャンプです。キャンプ6年目で、私は班長になりました。特に大変だった事は、班をまとめることです。食後のプログラムは、集合場所に行くのがとても遅れてしまいました。低学年の子の後片付けが遅くなり、食器を炊事棟まで運ばなくてはならないということもありました。

今まで班長がこんなに大変とは思っていませんでした。けれども、だんだん班のみんなが仲良くなって協力し合えるようになり、集合場所に一番に着けることもあったので嬉しかったです。

低学年のお世話もあり、なかなか思いっきりはじけることはできませんでしたが、朝や自由時間には他の班とも交流して遊ぶことができ楽しかったです。レナちゃんと横浜から来た真理奈ちゃんとは特にたくさん遊びました。

教会学校最後のキャンプで、いちばん心に残っていること。それは、キャンプファイヤーの火が燃え上がっていくところです。“来年もみんなでキャンプに行きたいな～。”そんなことを考えながら炎を見つめていました。

(6年 晴加)

もっさんがチーフだったから、リーダーとうそう中とか水鉄砲とかいろいろ新しいプログラムがあったのでおもしろかったです。もっさんが一生けんめいやっていたのが伝わりました。

さいごにもっさんに、みんなからのありがとうのサプライズをしたときに、もっさんが泣いたのでそれだけでもっさんがみんなのために全力投球してくれたことがわかりました。

(5年 萌)

8月8日から11日までうわのキャンプ場へ六甲教会学校のみんなとちいさきのみんなで行きました。

私が一番心の中にのこった所は「当たり前をそうぞうしよう！！」のプログラムです。なぜなら、今までの私をふりかえることができたからです。今までの私は、このことを考えもしたことがなかったし、今までのことが当たり前だと思っていました。だから、私は、何かをしてもらったときは、「ありがとう」の言葉をわすれないように気をつけたいと思います。

そして、東日本大しんさいで、家族をなくした子どもたちは、私たちみたいに、しあわせにはくらせていないと思います。私が、こんなにしあわせに生活をおくれていることをかんしゃしています。

(3年 若菜)

キャンプのリーダーとうそうちゅうでは、2300もっさんで三位になり二位とすごくさがひらいてくやしかったです。きもだめしのまえのコウキリーダーのはなしがおもしろかった。

(1年 風太)



中高生会キャンプ(8月13日～15日)

リーダー 佐藤

中高生会でレーベンス・シューレを訪れたのは、2回目でした。今回のキャンプでは、「自分はどういう生き方をしていくのか」ということをテーマにして、平和を題材にして中高生に考えてもらいました。私が心がけたことは、各リーダーの持ち味を生かすことでした。大人のリーダーを中心に、それぞれ中高生へしっかりとしたメッセージを語る事が出来たと思います。

次の世代への信仰の継承は大変重要な教会の使命です。中高生会のキャンプに関わることは、「なぜ信仰を持つことが大切なのか」を私自身にも問い続け、伝えてゆくことだと実感しています。

以下、参加した中高生たちの感想文です。

今回のキャンプは教会学校のすぐあとで、夏休みの宿題もたくさん残っていて、正直、来る前は宿題を優先させたいと思っていました。でも、来てみると、たくさん楽しいこと、学ぶことができました。ゲームをしたり、ブランコやベンチを作ったり、調理したり、教会学校ではリーダーをしていたので、今回のキャンプは教会学校のキャンプとは違って楽しみがありました。また、中高生、大学生、大人の人たちのノリはとてもおもしろかったです。

それと、中高生をまとめ、プログラムを進行していった大学生、大人のリーダーの方々の姿には学ぶところがありました。

今回のキャンプはとて楽しかったです。宿題をしていて学べないことをたくさん学べました。来年も、出来れば参加したいと思います。

岳 (高1)



このキャンプで楽しい友達に出会い、美しい自然とふれあい、沢山おいのりし、とても良い経験が出来ました。

また、原爆のことについてお話を聞いたり、ビデオを見たりして、私は「これは過去のことではない。」という言葉に共感しました。広島原爆のことについて、ただ知っているのではなく、そこから考え、行動していかなければならぬとわかりません。

これから、この世界を平和にするのは、このキャンプで共にすごした私たちのような若者だと思いません。よく考え、協力して世界の平和を本当に実現したいと思いました。

啓莉 (中3)

この3日間普段とは違う生活で暮らして大変な思いもしたし、つらかった事もあったけど、仲間と一緒に大変なことを乗り越えられたし作り上げることもできた。

キャンプの中で考えさせられることもいっぱいあったし、初めてで何もわからないこともあったけど、みんなと助け合うことの大切さを学べた。

この生活を送るのは3日間で終わるが、普段の生活に戻っても忘れずに考えることが出来たらと思う。キャンプで得た目に見えない何か、得たのなら次はそれが何だったのかを見つけていきたい。

有美子 (中3)

中高生会のキャンプに参加するのははじめてで、どのようなことをするか、レーベンス・シューレがどんなところかも何も知りませんでした。キャンプに参加して、風呂を薪で焚いたり、竹を切ったりして、神戸ではなかなか体験できない様々なことが出来ました。特に木を切るというのは初めて体験しました。チェーンソーを使い、木を切るというのは大変楽しかったです。風呂を焚くのも大変でした。木を燃やしてもなかなか湯が温まらず、二日目の風呂はプールようになってしまいました(笑)。このような体験をさせていただき、ありがとうございます。

優 (中3)

今回のキャンプでは、都会などでは味わえない素晴らしい経験をすることが出来ました。

私が一番印象的だったのはブランコを作ったことです。あまり、しゃべったことのない人たちとも協力してブランコを作ることが出来ました。完成すると、みんなで遊びました。

次の日の朝、30分間沈黙する時間の時に、やはり、たがいに協力し合うのは大切なんだと思い、イエス様が見守って下さったことに感謝しました。 尚 (中2)

この3日間は初めて体験することがあって、とても楽しかったです。特に印象に残ったのが、1日目のトラック。初めてトラックの荷台に乗って約10分間、森林の中を走ってガタガタしたり、時には段差でおしりが浮いて、長時間のアトラクションみたいな感じでした。2日目の印象に残ったのは、花火で打ち上げ花火が初めてで最初はしょうげきがありました。3日目はお茶をこぼしてしまってテンションが下がりました。(もうしわけない) 万里亜 (中1)

今回、私ははじめて六甲教会の中高生会のキャンプに参加させてもらいましたが、とても楽しくすごすことが出来ました。

みんなやさしくて、明るいので、安心感があったというか、とても温かい大家族みたいな感じでした。だから、このキャンプをきかくしている人や、キャンプに来ることの許可をくれたお母さんなどにはすごく感謝しています。ありがとうございました。 七菜 (中1)

このキャンプで、たくさんの人と仲良くなれました。

初日は知らない人だらけで、不安もいっぱいあったけど、すぐに友達もたくさん出来て、不安もじょじょになくなっていきました。料コンやピザも、みんなで協力したからすごく良いものになりました。初日には少しあった不安もどこかへふきとんで、最終日にはもう少しこのメンバーでキャンプをしたいなと思いました。来年もまた参加したいです。 七穂 (中1)



<行事報告>

納涼の夕べ(8月17日)

地区会行事企画チーム 納涼の夕べ担当 入江

8月17日納涼の夕べがお天気のなか行われました。

当日は、午後1時頃から設営の為に男性方と教会学校 中・高生のたくさんの皆様が来て下さり、汗だくになって働いて下さいました。若い力のお陰もあり、短時間で会場準備が出来上がりました。

そして、イグナチオの台所では、お手伝いの婦人方が仕込みの用意に取りかかり、ミサが終わる黄昏時には、いいにおいが漂い始めました。

たくさんのお客様とたくさんのお手伝いの方が一緒になって、食べて、飲んで、お腹も一杯になった頃、橋岡さんご夫妻の御協力により、ブルーグラスの曲が演奏されました。会場は一気に盛り上がり、いつまでもいつまでも音楽に酔いしれ、楽しい時間を過ごすことができました。

子供達は、ヨーヨーにスーパーボール、ゲーム、花火に夢中になりました。

皆さまの心の中に夏の思い出がひとつ出来ましたでしょうか・・・。

たくさんの方々の暖かいご協力に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



8月17日に笑顔だらけの納涼の夕べが開催されました。今年は天候が良く夜空も見えて清々しい納涼の夕べになりました。

灘南地区の担当は焼き鳥、焼き鳥バーカー、イカ焼きの3品を提供しましたが、焼いても焼いても追いつかず大変ご迷惑をかけましたが、皆様のおかげで完売する事が出来ました。有難う御座いました。今年は準備段階から参加しましたが、猛暑の中でテーブルを運んだり、テント張りをするだけでもシャツが汗でビショリになり、動いては休憩を繰り返しながらの準備作業になりました。夕方になってからは日陰に入ったら涼しい風が舞いこみ、心地良い中での作業でしたが、納涼の夕べが始まる30分前からイカ焼き用の炭に火を入れ、屋台内は少しずつ温度が上がりだし、イカ焼き焼き鳥を焼き始めたら一気に汗が昼間と同じだけ吹き出しました(汗)。

完売した後、ひと息ついている時に、橋岡夫妻が奏でる Music が夜風に吹かれて心地よい音色で聴こえてきました。その鼓動がそばに居た小さい子供にも伝わり、演奏している2人の前で踊りだして教会内が一つの輪の中で結ばれている感覚に陥りました。松村神父さんも橋岡夫妻の演奏で歌声を披露して頂き、教会の輪がまた一層大きくなり、素敵な時間を過ごす事が出来ました。

納涼の夕べの行事や地区会などの新しい交流の機会に恵まれて、新しい出会い、つながりを深める事が出来た事が自分に取っては一番大きな収穫でした。たくさんの人々が教会を支えあい、共に歩んで行く素晴らしい教会家族の一員で居れることに感謝しています。

納涼の夕べでダンスを

三日月会 鈴木

昼間の猛暑もどこへやら、納涼の夕べが始まるころには夜風が心地よく、大勢の老若男女でにぎわいました。普段はあまりゆっくりとお会いできない方々とも今宵はたっぷりとお話できて、嬉しかったです。

大盛りの焼きそばや美味しいコロッケ、焼き鳥をビールの当てに歓談することしばし、お馴染みの橋岡ご夫妻によるカントリーミュージックの弾き語りが始まりました。とても意気の合ったお二人の演奏に観客の輪が広がり、ムード満点のBGMからテンポの速いウェスタンに変わったところで、みんなの目が前方に注がれました。かぶりつきでお母さんと一緒に聴いていた小さな男の子がリズムに合わせて踊りだしたのです。まだ立って歩くのもおぼつかないような幼い姿でしたがなんと、そのリズム感の素晴らしいこと、さらにもう一人の男の子も手を広げたり、足を上げたり小さな体をいっぱいに使ってかわいい創作ダンスを踊り続け、周りからはやんやの拍手と歓声が起こりました。あとで名前をきくと論平君(ろんぺいくん 一歳)とお友達の秀眞君(しゅうまくん 二歳)のおふたりでした。

ちいさな子供たちに負けじと大人たちも一緒に踊りだし、私も三日月会を代表してそばに居合わせたご婦人の手をつかんで、ワルツやジルバを踊りました。ああ楽しかった・・・。



TVのNHK講座にも出演しておられた雨宮神父様が丁寧に、わかりやすく聖書について教えてください。みことばを聴くことによって、みことばに生きること、すなわち福音宣教ができるのではないのでしょうか。

宣教部コーディネーター 佐久間

上智大学神学部教授 雨宮慧師による聖書講座

みことばに聴く



日時 2013年9月21日(土)・22日(日)

両日とも午後1時30分～4時

場所 カトリック六甲教会 主聖堂

神戸市灘区赤松町3-1-21 (阪急六甲駅より北へ徒歩7分)

講師 雨宮 慧 神父

東京教区司祭。ローマ教皇庁立聖書研究所卒。

上智大学神学部教授(聖書学)。(財)真生会館聖書センター編集責任者。

主な著書に「旧約聖書のこころ」(女子パウロ会)、「旧約聖書の預言者

たち」(日本放送出版協会)、「図解雑学旧約聖書」(ナツメ社)など。

主催 カトリック六甲教会

参加費用 無料

問い合わせ先 カトリック六甲教会事務局 078-851-2846

申し込み不要。ご来場には公共交通機関をご利用ください。



～社会活動部学習会～

日時：10月27日(日) 10時ミサ後

場所：イグナチオホール



10人に1人がなると言われている“認知症”や“痴呆症”。病気の違いや、病気の原因や症状、初期症状に早く気付くための予防法や治療法を学びます。

また、病気になった家族等とのかかわり方や、看病について学びます。

どなたでも参加ご自由です。

テーマ：“アルツハイマー型・痴呆症”や“認知症”を知る。

講師：大西 道生 先生(精神科医)

症状：進行する認知障害(記憶障害、見当識障害、学習障害、注意障害、空間認知機能や問題解決能力の障害など)であり、生活に支障が出てくる。重症度が増し、高度になると摂食や着替え、意思疎通などもできなくなる・・・。

カトリック六甲教会オルガンメディテーションシリーズのお知らせ

オルガンチーム 清水

音楽と祈りの時間、六甲オルガンメディテーションシリーズも3年目に入り7回目を迎えます。最近では六甲の信徒だけではなく、他のカトリックまた教派を超えて様々な教会から、さらに教会外からの参加者も増えて宣教の役割をつとめるようになってきました。

今回の「オルガンメディテーション」はカトリック田園調布教会オルガニスト、久野将健（くのまさたけ）氏のオルガン独奏です。

久野氏は京都出身。現在京都ノートルダム女子大学にて准教授として教鞭を執られる傍ら、東京カテドラル、田園調布教会など様々な教会でのメディテーションやコンサートなど、意欲的に演奏活動をされています。今回のメディテーションのテーマは「信仰年によせて。」プログラムは、17世紀前半にイタリアのフレスコバルディが作曲したカトリックのミサ曲から、「ごらんよ空の鳥」「マラナタ」などの聖歌でおなじみの新垣壬敏氏の作品まで、カトリック教会ならではの曲ばかりです。

秋のひとつとき、オルガンとともに瞑想と祈りの時を持ちませんか？皆様のご参加をお待ちしています。

カトリック六甲教会 オルガンメディテーションシリーズ Vol.7

～ 久野将健 オルガン独奏による～

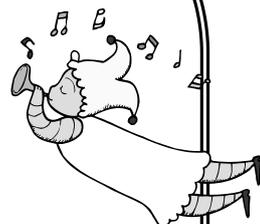
Organ Meditation 信仰年によせて

- 日時： 2013年9月29日（日）11:15（10時の主日ミサ後）
- 場所： カトリック六甲教会 主聖堂
- 入場料： 無料
- プログラム：

フレスコバルディ	「音楽の花束」より	使徒のミサ
新垣壬敏		越天楽のテーマによる変容
J.S. バッハ	幻想曲とフーガ	ト短調 BWV642 他

オルガン独奏： 久野 将健 Masatake Kuno

京都生まれ。東京藝術大学音楽学部オルガン専攻卒業。同大学院音楽研究科修了。安宅賞受賞。廣野嗣雄、鴛淵紹子、H. プュイグ＝ロジェの各氏に師事。フランス、スイスをはじめヨーロッパのマスタークラスでも研鑽を重ね、M. シャピエイ、N. ハキム、M. ラドゥレスクラらの指導を受ける。東京芸術劇場、東京オペラシティ、東京カテドラル、京都コンサートホール、豊田市コンサートホール、愛知県芸術劇場をはじめ国内各地にてソロ・伴奏等の幅広い演奏活動を行うほか、大学での教育活動や公開講座などにも力を入れている。岐阜聖徳学園大学教育学部准教授を経て、現在、京都ノートルダム女子大学人間文化学部准教授。カトリック田園調布教会オルガニスト。日本オルガニスト協会会員。



《 図書室からのお知らせ 》



2013年8月に入った図書から

☆ **教皇フランシスコ** —— マリオ エスコバル 著 新教出版

イタリア系移民の生い立ちに始まり、初めてラテンアメリカから選出された第266代教皇に就任するまで半生とイエズス会の背景を詳述。祈りに篤く、行動的で、貧しい人たちと共に生きる、親しみやすいその素顔を伝える。

☆ **薩摩のベルナルドの生涯** —— ホアン カトレット 著 教友社

フランシスコ・ザビエルから洗礼を受け、日本人で初めてヨーロッパに渡り、若くして帰天した日本人イエズス会士第一号ベルナルドの一生を描く。

☆ **フランシスコの祈り** —— 石井 健吾 訳 女子パウロ会

自然を破壊し、心を病む現代の人々に贈るアシジのフランシスコの祈りと賛歌。

たたえられよ 我が主 兄弟なる風 大気や雲 さま変わる 天の事象によって
あなたは それにより 造られた すべてを支えられる (「太陽の賛歌」より)

☆ **ヨハネ会50年の歩み** —— 社会福祉法人ヨハネ会

神戸市須磨区奥山畑町に救護施設ヨハネ寮を開設して50年、この間北区淡河町に障害者支援施設ヨゼフ寮を開設し、垂水区本多聞の神戸市立西部在宅障害者福祉センターの運営を受託して現在に至る50年のあゆみを記す。

☆ **『ふしぎなキリスト教』と対話する** —— 来住 英俊 春秋社

一昨年ベストセラーとなった新書(橋爪・大澤著「ふしぎなキリスト教」)を時に批判を加え、時に補完的に読み解き、キリスト教への素朴な疑問、誤解、確信を丁寧に解説する本格的な入門書。

☆ **ナツェラットの男** —— 山浦 玄嗣 ぷねうま舎

ケセン語訳聖書の山浦先生による小説。ナザレのイエスについて、聖書に登場する人の眼を通して、その生涯を描き出す。大地の匂いと人の息づかいの中に、新しい色彩をまとめてイエスの物語がよみがえる。

☆ **イエスキリストの生涯** —— 小川 国夫 新教出版

5年前に80歳で亡くなったカトリック作家である著者は1995年NHK放送の「人間大学」で「イエスキリスト」を担当しました。

「イエスは全人類の救いのために迫害を受け、十字架に磔になって殺されたのです。他人のために自分の命を捨てるのが最も大切な愛の行為であることを…小川の祈りもその点にあった…」
(加賀乙彦のまえがきより)

☆ **聖霊とエウカレスチア** —— ラニエロ・カンタラメッサ サンパウロ





みんなの広場

公教要理

ヨハネ 三好

嘗ては何かと言えば「公教要理」であった。聖書はみだりに読んではならないとされていた。今は何かと言えば「聖書」、「公教要理」はどこかへ消えてしまったかのようだ。近頃書店の書棚にある聖書に関わる書物は、なぜこれが聖書なのかと問わざるを得ないものが大部分だ。反論は全くといってよいほど見ることはない。反論しなければ肯定と見なされる。聖書を読んでどうしてこのような結果になるのか、啓示は聖書と聖伝によって示めされているという事実を蔑ろにした結果ではないか。神への委託が怠慢の口実になっていることはないか。

嘗てこの教会はイエズス会の豊富な人材に支えられて信徒はぶら下がっておればよかった。教会の諸事に携わるに当たっても、司祭たちの指示に従っておればよかった。信徒が自分の意思によって働くことは避くべきこととされていた。

しかし、現代は事情が一変した。信徒が自分の足で立ち、動かなければならなくなった。その信徒の実態はどうか。司祭養成のためにどれほどの勉強が必要とされているか、それに対して信徒の実態はどうか。教会の諸事に携わる信徒も多くなった、というよりは携わらざるを得なくなった。その信徒の実態はどうか。

「カトリック教会のカテキズム」もその要約も日本語に翻訳されて出版されている。そのうちのせめて「カトリック教会のカテキズム要約」を座右に備えて日頃開いている信徒は何人いるだろうか。人間は知らないことはできない。教え伝える者に接する機会が乏しくなった今、我々自身も極力自ら備えなければならなくなった。「公教要理」は無用になったのか篤と考えてみよう。

「毎日のミサ」という出版物がある。毎日読むのに手頃だ。中心はその日の福音だから通して読むと福音の手引きあるいは簡単な解説と言ってよい。物々しいことを言っても挫折するから、毎日一度通して読むだけでもよい。此奴はどんな奴か、神様は先刻ご承知だからそれでも何かを心に刻み込んでくださる。そして必要なときに思い出させてくださる。

導く者がいなければどうなるか。主日のミサ毎に祈る「召命祈願」は本当に切実な祈りになっているのか、口先だけの言葉になってはいないだろうか。これは主がご自身で命じられた祈りではなかったか。

教会報8月号にあった松村神父様の一文「聖母の被昇天」の末尾に“Ave Maria Gratia Plena”と「アベ・マリアの祈り」の冒頭が書かれてあった。今、日頃接する典礼は殆ど日本語になっている。しかし、その原典は今も教会ラテン語であることは覚えておいてよいだろう。同じ言葉で祈ることができなくなったのはバベルの塔の罰の結果だが、必要でもない外国語の習得に費やす時間と労力があるなら、その時間と労力でもう一度同じ言葉で一つの心で祈ることを考えてはどうか。典礼のラテン語は我々にとって単なる外国語ではないことを覚えておこう。(終)

<p>教会報 10月号の発行は、9月 29日(日)です。 編集会議9月 22日(日)です。 記事原稿は、9月 15日(日)正午までに信徒会館 受付へご提出願います。 (広報部) http://www.rokko-catholic.jp</p>	<p>カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会 〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21 電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6 F A X 0 7 8 - 8 5 1 - 9 0 2 3 発行責任者 松 村 信 也 編 集 広 報 部</p>
--	---